

「近代日本の怪異とナショナリズム」趣旨文

本パネルではナショナリズムが孕む問題系の広汎さとその流動性とに留意しつつ、政治・軍事・天皇といった関連する諸テーマと関わらせながら近代日本における〈怪異〉とナショナリズムについて、「批評性」と「協力」という一見相反する両側面からアプローチしたい。

近代において強力な規範性をもった社会思潮として前景化するナショナリズムは、人びとに対して情動的な一体化を要請するとともに、死をも含めて「善き」主体としてあることを要請する。

近代日本の〈怪異〉もまた国民国家の言論統制や政治との連関を持たざるを得なかったことは夙に指摘されている（谷口基『怪談異譚 怨念の近代』水声社、2010等）。〈怪異〉は国家から規範の外部として抑圧され（東アジア怪異学会『怪異学の可能性』角川書店、2009等）、その中であって近代に対する批評性を持ち得ていた（清水潤『鏡花と妖怪』青弓社、2018等）。だが〈怪異〉は時に近代的な規範と接触し、寄り添い、時には加担してきており、その側面は改めて問われるべき問題として残されている。

以上を踏まえ、本パネルでは近代日本に散種された〈怪異〉がナショナリズムとのあいだで如何に手をつなぎ、切り結び、交雑し、抜け出していたのかを考察し、それを通して近現代日本を問うことを目指したい。また本パネルでは日本文学のみならず思想史・メディア史の研究者を迎え、学際的な〈怪異〉研究という人文学研究の生存に関わる可能性を問うことも射程に入れている。これは〈怪異〉をめぐる文化状況が多様化・拡散している昨今における方法的な「サバイバル」を問う可能性をも持ちうるだろう。

具体的に井関大介は、哲学館（現在の東洋大学）を創立した哲学者であり、「妖怪博士」の異名で知られた井上円了の「妖怪学」と、彼の天皇神話に対する姿勢について論じる。円了は頻繁に全国を巡って庶民を相手に講演を繰り返したが、その巡講において最も多く論じられたテーマが教育勅語・修身であり、次が妖怪・迷信であった。一般的に円了の妖怪学は合理主義的な迷信打破の運動であったと評価されているが、そのまなざしが天皇や国家に対して向けられた時、どのように屈折するのか。彼にとっての近代と国家の関係を、妖怪学の内容を再検討することから読み解いていく。

また鈴木彩は、日清戦争中に発表された泉鏡花の児童向け作品「海戦の余波」（1894・11）を取り上げる。少年・千代太が海底世界を訪れ、戦死した中国兵の魂と戦う同作では、軍人である千代太の父が尊敬すべき理想像とされ、中国兵があからさまな敵役とされるなど、戦意高揚を目的とした物語の枠組みに沿った描写がなされている。だが同作は一方で、泉鏡花が初めて明確に幻想的な異界（海底世界）を描いた作品でもある。戦意高揚のための物語において、こうした異界や怪異がどのような役割を果たすのか。同時代の言説および作品との距離を測りつつ明らかにしたい。

そして茂木謙之介は1980年代を中心として雑誌『ムー』を検討し、そこに内在する天皇・皇室の表象を分析する。そもそも近代国家の希求した天皇の神格化やそれを正当化するための系譜的欲望は超自然的なものと呼び込むオカルト的想像力によって支えられてきたものであり、それは戦後社会においても残響している。特にオカルトブーム以降の古代へのまなざしはかかる問題系と絡み合いつつ展開していたことは見逃してはならない。かかる動向を繙くことで現在もなお密やかに展開する天皇の宗教的権威性の一端を明らかにすることを目指したい。

コメンテータには小松史生子を迎え、議論を行う。